

## 編集委員が選んだ本

### 『憲法は、政府に対する命令である』

ダグラス・ラミス／平凡社  
2006年8月 1365円

沖縄を拠点に活動しているアメリカ人の政治学者が日本語で書き下ろした「日本国憲法論」である。だからだろうか、その論理構成は明快である。憲法に従う義務があるのは国民ではなく政府であること、現在まで続いてきた護憲運動が政府に押しつけ続けてきた憲法であること、憲法が権利を保障しているのではなく、権利を獲得するために闘う権利を保障していること…そしてこれが本書の一番の特色なのだが、その憲法の理念をまさに闘いながら獲得しようと「不断の努力」を行ってきたのが、憲法公布時は日本ではなかった沖縄の人々であるという指摘である。沖縄在住の著者ならではの視点であろう。

### 『戦後の終わり』

金子勝／筑摩書房  
2006年8月 1890円

著者渾身の力作、と受けとめた。2年間にわたる、朝日新聞論壇時評で彼が問い続けた「新しい時代認識の枠組み」をたどる第Ⅱ部と、ほぼ書き下ろした、第Ⅱ部を上回る量の第Ⅰ部とからなる。圧倒的な情報量に驚かされ、彼の“いま、を見る眼”の力に多大な示唆が得られる。

### 『戦争で死ぬ、ということ』

島本慈子／岩波新書  
2006年7月 777円

自分自身の実践を含めて、平和教育はどうあればいいのか、よく考える。言葉が空回りして、教室に空しく響いていないか。多くの生徒たちの受けとめ方が、他人事としてのものになってはいないか。戦争経験者の、重くリアルな話ですら、それだけでは、生徒たちの心に届いていなかったりするのではないか…。

本書は、「戦後生まれの目で、戦後生まれにも通じる言葉で、」「私と同じく、戦争を知らない人々のために」書かれた。かつて戦時中、「戦争とは、こんなものとは知らなかった!!」という無数の悔恨があったと思う。そこからは、「こんなことは二度と起こしてはいけない」という悲痛な思いが生まれたと思う。

でもまた、歴史はくり返すのか…悔恨も悲痛も顧みられず、何十年か時を経て、まったく同質の悔恨や悲痛がくり返されるのか…いや、安易に性悪説や「どうせ人間なんて」といった高踏的な断定に墮するまい。人間は学ぶことができるはずだ、という著者の思いが聞こえ、励まされる本である。

### 『日中関係 戦後から新時代へ』

毛里和子／岩波新書  
2006年6月 777円

小泉純一郎首相時代の2001～06年は、中国・韓国をはじめとするアジア外交の停滞期となった。2005年春の「反日デモ」以降の緊張する日中関係に危機感を募らせた著者は、政治家や巷でつくられる「脅威論」や「崩壊論」の害を立て直す視点を見出そうとしている。①1949～71年までの冷戦の中の対立期、②1972年以降70年代の戦略的友好期、③1980～90年代半ばまでの安定と発展の時期、④1990年代後半から2004年までの構造変動期、⑤反日デモ以降、とに分けて分析をし、「新時代」に向けた日中関係再構築のあり方を提言している。安倍晋三首相も就任当初は「アジア外交重視」のポーズをとったが、その後の政治姿勢において必ずしも言行一致していない。私たちがどう向き合って考えていくべきかを学ばされる。

### 『信長とは何か』

小島道裕／講談社選書メチエ  
2006年3月 1575円

歴史上有名な人物であればあるほどイメージで語られる。信長はその代表と言えるが、本書はその信長の虚像を、先行研究なども織り込みながら一枚一枚剥がしつつ実像に迫っていく。桶狭間の戦いが奇襲攻撃ではなかったこと。楽市令は座の撤廃を目的としたものではなく、商人を城下町に集住させるための時限立法であったこと。地域間の経済的統合が進展している状況の中で、信長の行った暴力的な政治的統合（天下統一）は必要なかったことなど、信長とその時代像の見直しを迫っている。

### 『私のように黒い夜』

J.H. グリフィン（平井イサク訳）  
／ブルース・インターアクションズ  
2006年8月 2310円

「白人が黒人になったら、どんな風に自分を変えなければならないのだろうか？ 皮膚の色という、自分でどうすることもできないもののために差別を受けるとするのは、どんな気持ちだろう？」と、1959～60年のアメリカ合衆国の不条理な黒人差別の実態を「体験」から告発した白人がいた。皮膚の色による違いで差別することがいかに非科学的・非人間的なことであるか、そうした差別に迎合してしまう人間の弱さ、それを克服しようとする人間の尊厳の偉大さを感じられる。そして、私たちの身近な生活で「人権」がいかなる状況にあり、私たち一人一人がどのように行動しているかを考えさせられる。